学　　年	小５年	郡　市　名	豊　　川
提　案　者	豊川市立代田小学校		坂川　紘一

「仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」

ー地域教材を活用し、子どもの思考を深める授業のあり方ー

１　主題設定の理由

令和元年度、豊川市教育研究会の社会科部より授業研究の委託を受けた。研究のテーマは「仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」である。委託を受けた当初は、テーマが大きすぎてめざしていく授業のイメージすら見えなかった。特に気になったのは「参画」という言葉だ。意味を調べると「事業や政策などの計画に加わること。」とわかった。小学校５年生が事業の計画に加わることはできないかもしれない。しかし、計画をすることや「どうしていくべきなのか」ということについて思考を巡らせることならできるのではないか。そうすることが、小学生なりにできる社会づくりへの参画の姿だと考えた。その姿をめざす過程で「仲間とのかかわり」を必要とする場面を意図的に設定することで、研究テーマに近づけると考えた。

そこで、生きていくうえで欠かせない「食」について学習する単元を設定すれば、問題意識をもち学習を進めていけるのではないかと考えた。「食」の学習をより子どもの身近なものにするために、代田小学校校区内にある「寺部食品」という会社を取り上げた。校区にある工場を取材することで、学習がより身近なものと捉えられ、強く問題意識をもたせることができるのではないか。

寺部食品は主に国産の大豆を使用し、豆腐や油揚げを作る食品工場である。地産地消を推進するため、愛知県産の大豆を多く使用して食品を作っている。豊川市のスーパーにも寺部食品の豆腐や大豆製品が数多く販売されている。その反面、安価の外国産の大豆を使用した豆腐におされているという問題を抱えている。

この寺部食品を学習の足掛かりにして「わたしたちの生活と食料生産」の学習を進めていく。そして、寺部食品から徐々に視野を広げ、日本の食料問題まで目を向けるように単元を構成する。寺部食品が抱えている問題を、教科書に記載されている日本の食料問題とリンクさせることで、子どもたちの周囲に迫りくる自分の問題として認識することができるだろう。そして、切実感をもち授業にのめり込ませていきたい。その問題の解決に向けて「どうしていくべきか」考えを巡らせる姿が期待できるのではないか。その解決に向けて考えを巡らせる姿こそ、小学生なりの「社会づくりへの参画」のあるべき姿ではないかと考える。

２　めざす子ども像

①子どもたちが強く問題意識をもち、主体的に学習をする姿

主体的に学習を進めるためには問題意識をもつことが大切である。子どもが自ら「知りたい」「調べたい」と思うことで主体的に学習が進んでいく。強く問題意識をもたせ、探求心や知的好奇心を刺激することで、主体的な学習につながると考える。

②仲間と関わりながら考えをまとめ、これからの生活に学習を活かそうとする姿

社会に参画することは小学校５年生では、ハードルが高い。しかし、これからの社会のことに問題意識をもって、考えることで、「こうしていったらいいんじゃないか」と自分なりの考えをもつことができるのではないか。個人の考えをもたせた後に、仲間と意見を交流する。そうすることで、同じ問題について多面的な考え方を知ることができるだろう。仲間との意見交流の後に、自分の意見を再考させる場面を設定することで、様々な考え方にふれる中で「これから自分はこうしていこう」という思いを強くすることができると考える。

３　研究の仮説と手だて

仮説１

魅力ある教材を用いて、子どもの思考に沿った学習課題・授業展開を設定すれば、問題意識をもち主体的に学習をするようになるであろう。

手だて１―１

単元の導入では、国産・外国産の豆腐の食べ比べをする。豆腐を購入する際に考慮すべきであろう値段や産地を知らせ、どちらを購入したいか判断することで、食の学習について関心をもって取り組ませる。

手だて１－２

地元の企業「寺部食品」へ取材に行く。寺部食品で聞いたことと、教科書の記載事項がリンクすることに気づかせることで、日本の食について問題意識をもち、主体的に学習に取り組ませる。

手だて１－３

授業の終末には本時の学びのふり返りを書かせる。授業のふり返りから子どもの疑問や興味を見つけ、次時の問題設定や授業展開に活かすことで、主体的に学習させる。

仮説２
　仲間の意見に触れながら、自分の考えを再構築したり、今までの生活を見直したりすれば、自分なりの考えをもち、自らの生活に生かしていけるようになるであろう。

手だて２―１
　個人で意見を考えさせたのちに、周囲の児童と意見交流の時間を設定する。そうすることで、同じ問題について多面的な考え方を知ることができる。また、自身の考え方が偏った考えになっていないか確認でき、自分の考えを再構築させる。

手だて２－２
　日本の食のこれからについて、個人の考えをもたせる。地産地消や食の安全性といった問題を総合的に考え、国産・外国産の豆腐どちらを選ぶか選択させる。導入時に選択した理由と比較することで、今までの自分の生活を見直し、これからの生活について考えをもち、学習が生活に生かされるようにする。

４　単元構想（当初）

学習活動　・子どもの反応	※留意点❓切り返しの発問
≪社会≫高い地域のくらし ・資料を根拠に考えをもつことができたよ。 ・地域の気候の特徴を生かした産業を行っているんだな ・気候の特徴を生かした産業があるんだね。	※学習意欲を高めるために、本物の豆腐を用意し、どちらの豆腐を買うか選ばせる。
どちらの豆腐を選びますか① ・Ａの豆腐だよ。だっておいしかったもん。・ほかに考える条件が欲しいな ・Ｂの豆腐だよ。だって、安いよ。　・国産と外国産の違いがあるね	※単元を通しての学びの軌跡を分かりやすくするために、ふり返りシートを用いる。
国産と外国産の違いは何だろう②	❓国産と外国産の違いは何だろう？≪広める≫
・外国の食べ物がたくさん輸入されているね。　・日本の食料自給率は低いね。 ・外国産の食べ物は、国産の食べ物より安いね。	※ふり返りシートから子どもの疑問や考えたことを次時の学習へとつないでいく。
国産が高くて、外国産の食べ物が安いのはどうしてだろう③	※日本の少量生産が直面している問題を知ることで、日々の生活に欠かせない食料に大きな問題があると理解を深める。
・国産の食べ物は安全性に特に気を付けてるから、値段が高いんだね。 ・外国産の食べ物は安いけれど、安全性が不安に感じる食べ物があるな。 ・安い外国産の食べ物と高いけれど安全な国産の食べ物があることが分かったよ。	❓国産が高くて、外国産の食べ物が安いのはどうしてだろう。≪深める≫
日本の農家や企業が価格が安い外国産の食べ物に、どのように対抗しているのか質問を準備しよう④	※食料別自給率のグラフから大豆の自給率が一段と低いことに気付かせる。そのような現状でも、国産大豆を使っている寺部食品に興味をもたせ、見学への意欲を高める。
・安全面で気を付けていることは。　・外国の大豆を使わないのはどうして。 ・高価な国産大豆を使い続けている理由は何ですか。	
さあ、寺部食品へ工場見学に行こう⑤⑥	※課題をもって工場見学に臨めるように、事前に何を聞きに行くのか個々に課題を持たせておく。
・愛知県産の大豆を使用しているんだ　・豆腐を作る機械がたくさんあるね。 ・どんなことに気を付けながら安全性を確保しているのかな。	
工場見学から分かったことをまとめよう⑦⑧⑨	
・愛知県産大豆を使い続けているわけが分かったよ。 ・生産者と結びつくことで安全性を高めているんだね	
どちらの豆腐を選びますか理由や根拠をはっきりさせて考えよう⑩⑪	❓どちらの豆腐を選びますか。≪深める≫
・安全面で安心感があるため、国産を選びます。 ・地産地消を進めていきたいから、国産を選びます。 ・味が変わらないと思うから安い外国産を選びます。 ・給食でも外国産の冷凍豆腐が使われているから外国産を選びます。 ・Ｂを選びます。高い豆腐との違いが安全面以外に見当たらないから。	❓かぼちゃだったらどっちを選びますか。≪広める≫
市や県はどのように食料問題を解決しようとしてるか調べよう⑫ ・グリーンセンターやＪＡで地産地消を進めているんだね。 ・学校給食も地域の食材を積極的に取り入れているんだね。安心です。	※価格、安全性、味覚、原材料など多くの観点から考え、どちらかの豆腐を選ばせる。
・自分たちの生活に関わる食料問題を、自分のこととして考えることができたよ。 ・これからの食料生産について考えようとする気持ちが高まったよ。 ・安全性と価格のバランスを調整しながら、これから買い物をしていきたいな。	※様々な考えを引き出すために、座席表を利用し、多くの児童の考えを出させる。

５　抽出児について

　Ａ児は、好奇心旺盛な児童である。やってみたいこと、知りたいことがたくさんあり、興味のあることは進んで取り組もうとする姿勢をみせる。学習にも前向きに取り組む。社会科の学習では資料から分かることをたくさん書き出し、資料の読み取りができるよう努力をしていた。読み取りの回数を重ねるたびに、資料の内容を的確に書き出せるようになった。しかし、全体の場での発言となると躊躇してしまう姿が見られる。

　地域の気候の特色を学習した際に、Ａ児に「本当に北海道は梅雨がないの」と聞かれたことがある。私自身、北海道に住んでいたことはなく、教科書や資料の記述から北海道に梅雨はないと知っているだけである。しかし、Ａ児は本当にそうなのかという純粋な疑問をもっていた。

　このようなＡ児の探究心を本単元を通して、学習内容が生活と結びつくことを実感できるように単元を進めていきたい。本単元は資料だけを読み解き、絵に描いた餅のような話を進めるのではなく、実際に工場に足を運び、五感で現実を感じながら、学習を展開していきたい。単元が終わった時に、Ａ児が学習した事柄について自分なりに意見をもち、これからの行動を見直していこうという気持ちを抱いている姿を期待する。

６　研究の実際と考察

（１）問題意識が重要！子どもが問題意識をもてる取り組み

①寺部食品との出会い「どちらの豆腐を選ぶ？」（導入）

　本単元は豆腐の食べ比べから始めた。（手だて１－１）子どもの目の前にお皿に乗せた２つの豆腐を用意した。１つは国産の寺部食品が作った豆腐。もう１つは別の企業の外国産の豆腐。原材料を見ると、アメリカ・カナダ産の大豆と書かれていた。子ど

【資料１　豆腐の食べ比べ】

もは興味津々に、２つの豆腐にはどんな違いがあるのかを話していた。この２つを子どもに食べ比べさせ、判断基準を変えてどちらを購入したいと思うか選択させた。結果は資料２のようになった。豆腐を選択する条件を増やしていくことでどちらを選択するかの答えが変わった。ひとつひとつ条件を増やしていくたびに、「う～ん」「どうする？」と悩む声が聞こえた。現段階では、子どもたちが判断をする根拠は実生活の体験でしかない。原産国を提示した途端、国産を選ぶ子が増えた。そこで「味は外国産の方が好みなのに、国産の豆腐を選ぶのはどうして」と聞いてみた。「国産は安全だと思うから。」「外国産の方が味は好きだけど、あぶないから。」など、実生活から食の安全性についての知識があることがうかがえた。しかし、なかには「中国産のものでなければ大丈夫だよ」と偏った考え方をする子もおり、正しい知識を与え、選択の根拠にする必要も感じた。

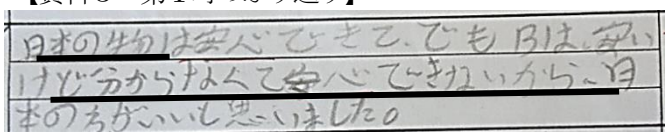
【資料２　食べ比べの結果】

判断基準	A（国産）	B（外国産）
味覚	５人 ・Aの方がおいしい	２３人 ・Bの方がおいしい
味覚+値段	６人 ・高いけど、好きな味を食べたい。	２２人 ・Bの味が好みだし、安い。
味覚+値段+原産国	２２人 ・高いけど国産は安全だと思うから。	６人 ・Bの味が好みだし、安い。

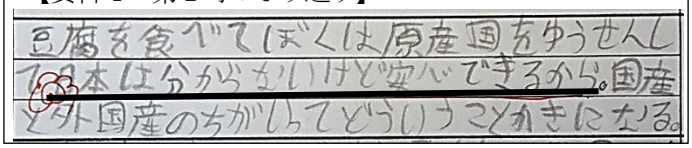
A児は判断基準を増やすたびに、真剣に考えていた。最終的には国産を選択したが、それまでは外国産を選んでいた。生活の中で食に関する知識をもっていたのか、その場の雰囲気に流されて選択したのかは定かではないが、A児が明確な根拠をもたず選択したことは間違いない。それはA児が「なんとなくＡ（国産）を選んだ」とふり返りに書いているからである。少なくともこの時点でA児は、豆腐を選択するのに主観的な判断をしていたことがわかる。

第１時の最後には、「寺部食品を知っているか？」と子どもに聞いてみた。「知っている。だけど、何を作っているのかは知らない。」大半の子どもはこう答えた。「今食べた国産の豆腐は校区にある寺部食品が作った豆腐だよ。」と伝えると驚きの声が上がった。さらに、食べた豆腐のパッケージの写真を見せると、「家でも買ってる」「スーパーで見たことある」と寺部食品の豆腐をより一層身近に感じ始めた。

【資料３　第１時のふり返り】


日本の物は安心できて、でもBは安いけど分からなくて安心できないから、日本のほうがいいと思いました。

【資料４　第１時のふり返り】


豆腐を食べてぼくは原産国をゆうせんしてB本は分からないけど安心できるから。国産と外国産のちがいってどういうことかきになる。

②日本の豆腐が高いのはどうして？

資料３、資料４は本学級の子が書いた第１時のふり返りである。多くの子が「日本の食べ物は安全」「外国産の食べ物は安心して食べられない」と書いており、食の安全性について思考の偏りを感じた。経験から外国の食べ物には危険なイメージをもっていたようだ。私たちの身の回りには、外国産の食べ物がたくさんあるのにも関わらずだ。外国の生産者だって、危険な食べ物を作ろうと思って作っているのではない。正しい知識を身に付けさせるべきだと感じ、単元構想の第２時と第３時を入れ替えた。子どもたちの思いを生かして授業を展開することとした。（手だて１－３）

第２時では、「国産豆腐が高い理由」「外国産豆腐が安い理由」「国産・外国産の安全性への取り組み」を学習した。ここでは、本単元に至るまでに資料の読み取りの練習をしたことが大いに生かされた。子どもたちは教師が提示した資料を的確に読み取り、同じ豆腐でありながら、国産・外国産で値段が違う理由を資料から導き出した。そして、今まで偏っていた外国産の食べ物への考え方を軌道修正することができた。確かに、外国産の食べ物の安全性が問われることがあるが、今の私たちの生活には外国産の食べ物は、欠かせないものとなっている。その現実の部分を抜きにして、「外国産の食べ物は危ない」というのはナンセンスである。子どもたちは今日の食の現状を学ぶと、「外国の生産者に申し訳ない。」「危険な食べ物を作ろうなんて思わないよね」と単なる思い込みによる偏った考え方を正すことができた。

A児は「資料から、外国では平均作付面積が大きいから一度にたくさん取れると思う」と発言した。外国の大規模農業の特徴を的確に資料から捉えることができた。このようにA児に発言する勇気をもたせることができたのも、これまでの地道な読み取りの成果ではないかと考える。

第２時は単元構想の順序を変え、子どもの思考に沿って授業展開を変えた。第１時のふり返りを読み、構想を変更したことで、子どもが偏った考えをもったまま授業を進めることがなく、正しい知識をもちながら授業を進めることができた。順序を入れ替えることには、頭を抱え悩んだが、結果的に良い方法に進んだのではないかと考える。

【資料５　第３時に提示した資料】

③外国産の食べ物も安心！でも日本はピンチ！？

資料５を提示した後に、「あなたの家の朝食はどっちに近い」と聞くと、思いのほかパンが主食の洋食の家庭が多かった。これには驚い

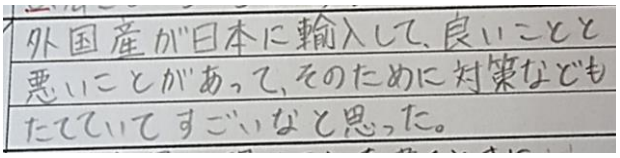
たが、前時に学んだ「今の私たちの生活には外国産の食べ物は、欠かせないものとなっている」ということが、より実感できた。

第３時での目的は日本の食の問題について問題意識をもたせることである。そのために第１時、第２時で食の学習が身近なものであると意識付けをしてきた。第２時の内容を変更したことがここでも功を奏した。国産・外国産の食べ物の安全性ついての学習を先にしたことによって食の安全性への見方が偏見のない状態で授業を進めることができた。

安い外国産の食べ物が輸入されるようになったことで、消費者は安い外国産の食べ物を買い、洋食を取り入れつつある現実がある。国産の農作物は売れ残り、農家は大打撃を受ける。結果的に日本の食料自給率が下がっている。ここまでを学習した子どもたちは「日本やばくない!?」「外国から食料の輸入が止められたら食べる物がなくなるかもしれない。」とつぶやき始めた。これらのつぶやきから、「日本の食が危うい状態にある」という問題意識が子どもたちの中で芽生え始めていると感じた。

資料６は本時のA児のふり返りである。A児は外国産の食べ物が輸入されたことに対するメリット、デメリットは理解している。外国産の食べ物が輸入されることに対する日本の対策も知った。しかし、日本の食料問題について危機感を抱いているとは考えにくい。この段階では、学習内容は理解をしているものの、自分たちの身の周りに起きている問題として認識できていないと考えられる。このようなA児に問題意識をもたせるために、工場見学の前に周囲との意見交流の時間を増やした。寺部食品が問題解決のためにどんな取り組みを行っているのか工場見学で探らせていけるようにした。

【資料６　A児のふり返り】


外国産が日本に輸入して、良いことと悪いことがあって、そのために対策などもたてていてすごいなと思った。

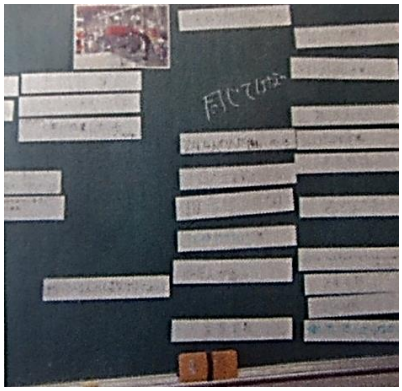
（２）問題を解決！！寺部食品に聞いてみよう！

①問題を捉えて、質問を考えよう！

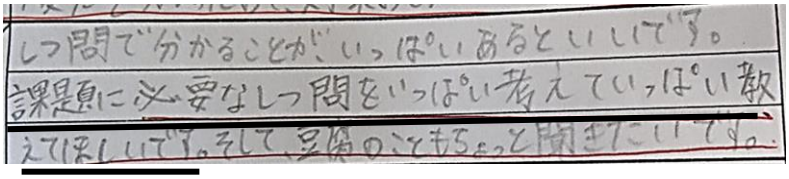
本単元での工場見学は子どもの意欲を高めるために行うという意味合いもある。しかし、それ以上に大切にしたいのは、「日本の食が危うい状態にある」という問題に対して地元の企業である寺部食品がどのような対策を講じているのかを探ることである。そのことを子どもたちに十分理解させたうえで工場見学へ向かった。

工場見学へ行く前には、子どもに質問を考えさせた。質問を考えさせる際には、センテンスカードを用いた。センテンスカードを用いた理由は２つある。１つは考えた質問を分類するためである。カードに記入し黒板に貼ることで、移動も可能になる。子どもたちも作業がしやすい。もう１つの理由は問題意識がもてているか、もてていないか把握するためである。問題をはっきりと意識している子は、「高い国産大豆にこだわって豆腐を作っている理由はなんですか」「外国産の豆腐に対抗するためにどんなことをしていますか」「地産地消に取り組んでいるのはどうしてですか」など、日本の食が抱える問題に迫る質問を考えていた。

【資料７　センテンスカード】



【資料８　A児のふり返り】


しつ問で分かることがいっぱいあるといいです。
課題に必要なしつ問をいっぱい考えていっぱい教えてほしいです。そして、豆腐のことももっと聞きたいです。

問題を意識していない子は、「一日の売り上げはいくらですか」「工場には何人の人が働いているんですか」「一番高い機械はいくらですか」など、寺部食品に限った質問を考えていた。問題を意識していない質問を淘汰するためにもセンテンスカードを用いて質問を分類したことは、有効な手段だった。（手だて２－１）

ここでの意見交流で、今回の工場見学で捉えてほしい問題意識が学級全体で明確になり、ほとんどの子が同じ問題意識をもち工場見学に臨めるようになった。それはA児のふり返りからも、問題意識が明確になったことがうかがえる。第３時まではぼんやりとしていた問題意識がA児の中で明確になった。

【資料９
工場見学で目を輝かせる子ども】

②さあ、工場見学だ！

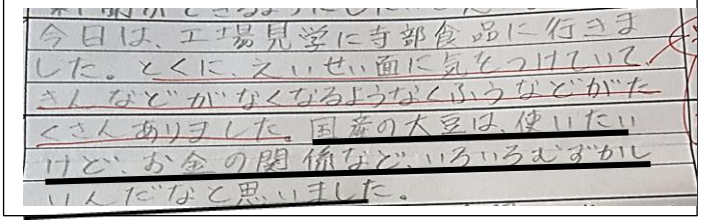
工場見学では、豆腐が出来上がっていく生産ライン、汚れを落とすエアシャワー、油揚げを揚げる大型機械、豆腐をパッケージする様子、発送前の大量の商品など子どもにとってどれも目に新しい光景だった。目を輝かせ工場内を見学する子どもたちからは、機械が動くたびに「おー」と驚きの声が上がり、「こんな風に豆腐を作っているんだ」「あの商品食べたことあるよ」など素直なつぶやきがあった。どの子も目を輝かせ、興味津々で工場見学を終えた。見学の後に、質疑の時間を設定した。これまでの学習から抱いた問題意識を忘れずに日本の食のことについて質問できるかが、この工場見学の重要なポイントである。子どもたちは考えてきた質問を、資料１０のように聞く

ことができた。寺部食品の方はとても丁寧に受け答えをしてくださった。寺部食品の方の話から、これまでの学習で学んだ言葉や安い外国産へどんな対策を取っているのかを聞き、これまで学習したことが実際に現実で起きていることが実感できたと思う。さらに、寺部食品の方は、現実のシビアな部分も教えてくれた。それは、地産地消についてだ。地産地消を取り組もうとしても、それができない現実がある。国産の大豆は高い。必然的に国産大豆を使って作った豆腐は高くなってしまう。高い豆腐は売れにくい。売れなければ会社の経営が難しくなってしまう。教科書の内容を越え、厳しい現実の世界で奮闘している寺部食品の方の話は、子どもの心に大きな影響を与えた。（手だて１－２）

【資料１０　子どもが質問した内容】
- 外国産の物がたくさん輸入され、日本産の物が売れなくなっていますが、どうしていますか。
- 地産地消についてどう思いますか。
- 安心・安全に向けた取り組みは何ですか。
- 外国産の方が安いのに、国産の大豆を使うのはどうしてですか。

資料１１は工場見学を終えたA児のふり返りである。寺部食品の方の話が心に残り、簡単に解決できる問題ではないと考えているようだ。本学級の多くの子もこのことに触れながらふり返りを書いていた。子どもなりに、予想していた問題への回答が、今回の話で打ち砕かれたのかもしれない。単純に地産地消を推進することが、日本の食を助けることにつながるわけではないと学べたのではないか。

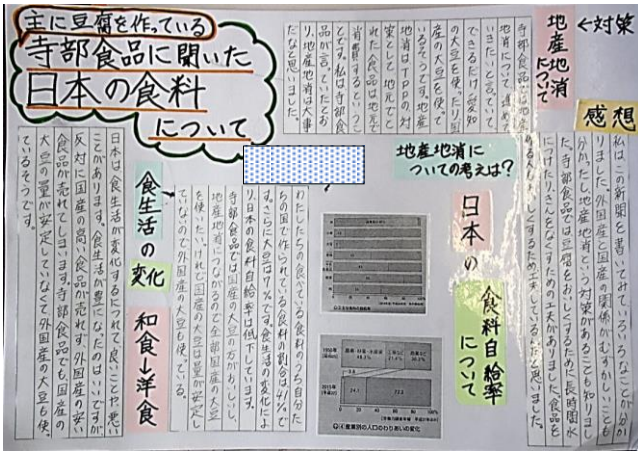
【資料１１　A児のふり返り】


今日は、工場見学に寺部食品に行きました。とくに、えいせい面に気をつけていてさんなどがなくなるようなくふうなどがたくさんありました。国産の大豆は、使いたいけど、お金の関係など、いろいろむずかしいんだなと思いました。

③企業の努力・対策をまとめよう

工場見学を終えた後に、「日本の食が危うい状態にある」という問題に対して寺部食品がどんな対策を講じているのかをまとめた。工場見学から多くの対策や生産者の思いを学んだが、観点を絞ってまとめを作ることとした。ここで大切にしたのは、寺部食品について分かったことをまとめるのではなく、これまでの学習と工場見学でリンクしていたことをまとめることである。①寺部食品が講じている対策について書くこと。②その問題への取り組みをまとめること。この２点に絞ってまとめを作成した。

【資料１２　A児のまとめ】



これまで、子どもたちは社会見学で分かった事をまとめていたのだと思う。今回のように問題意識をしっかりともち、見学に行った経験がないためか、うまくまとめが作れない子が多くいたが、１人１人に丁寧に声をかけ、子どもの困り感を解消していくと、次第にコツを掴み、まとめを作った子どもが多く現れてきた。

A児は、「食料自給率について」「食生活の変化」「地産地消について」の３つの観点で工場見学のまとめを書いた。資料１２はA児のまとめたものである。まとめの中で、A児は寺部食品の方が教えてくれた地産地消を推進したくてもできない現実があることについて触れている。問題解決の鍵は地産地消にあると考えていたA児にとって、工場見学での話はよっぽど衝撃的だったと考えられる。

工場見学を通して、これまでの学習で取り上げてきた教科書上の問題が、現実に起きていることだと子どもたちは実感したようだ。A児以外のまとめからも、そう考えている子が多いことがわかった。

（3）再考！どちらの豆腐を選ぶ？

これまでの学習で子どもたちが学んだことは２つある。①教科書から、今日の日本の食の現状（=危機）②工場見学から、教科書に書かれていない問題が実在すること。これらを学んだ子どもたちの中には、自然とこれからの自分たちの生活を考え直すような思考が芽生えてきた。「自分には何ができるか」と考え始めた。

そこで、第１時で考えた「どちらの豆腐を選ぶ？」を再考してみることにした。この単元の学習以前の子どもとは違い、彼らの中には多くの判断基準ができた。様々なことを学んだ状況で、どちらを選択するか考えさせた。結果とその根拠は資料１３の通りである。国産を選択した子が導入時より４人増えた。増えた理由として考えられるのは、導入時には知らなかった知

【資料１３　最終的な選択結果】

	国産	外国産
人数	２６人	２人
理由	・地産地消を推進していきたい。 ・日本の農家の助けになりたい。 ・値段は高いけれど、日本の食料自給率を上げることに協力したいから。	・味も好みだったし、何といっても、安いから。 ・外国産の食べ物も安全に作られていると分かったから。

識が身に付いたことだと思う。日本の食が危機的状況に置かれていることを知り、国産の食べ物を推奨していこうと彼らなりに考えだした結論と言えるのではないか。子どもなりにでも、少しでも社会が良い方向へ動くようにと考えて、考え抜いた先に出た子どもなりの答えである。これは外国産を選んだ子を否定するわけではない。外国産を選んだ子は、その子なりの考えをもっているため、しっかりと考えて判断したのだ。彼らは学習したことを鑑みても、現実的に金銭面が一番大切であると判断し、外国産を選んだのだろう。日本の食料自給率が低いのも知り、安全性にわずかながら不安が残ることも知った。全ての状況を把握してなお、外国産を選んだのである。その点でいえば、非常に残酷だが、現実的な選択ともいえるのではないか。現実をよく捉えて判断をしているとも言える。（手だて２―２）

ここで、ひとつ子どもの思考を広げる質問をしてみた。豆腐ではなく、他の食べ物ならどちらを選択するか考えさせた。豆腐は価格差が数十円だが、差が数百円になった時にどちらを選択するのか考えさせた。資料１４を提示すると、国産を選ぶと言っていた子どもの考えが大きく揺れた。先程まで、自信をもって国産の食べ物を推奨していこうと考えていたのにだ。価格差が大きくなればなるほど、このような思考の揺さぶりは大きくなるのではないかと思う。

【資料１４　国産・外国産のカボチャ】

100g＝２８円 573g＝１６０円	100g＝８８円 370g＝３２５円

A児はこの問いに戸惑っていた。地産地消を推進していきたいと考えたため、国産の豆腐を選択していたが、カボチャのように価格差が大きくなると、本当に国産を選択するのか迷いが生じていた。迷うということは、考えているということだと思う。A児は自分がどうすべきか真剣に考えていた。その判断が国産・外国産どちらを選ぼうと正解はない。ただ、A児の選択に至るまでの過程で考えるべき判断材料を増やすことができた。子どもの選択肢を増やし、これからの消費生活や考え方に影響を与えることができる実践になったと思う。

７　研究の成果と今後の課題

（１）仮説１について

①手だて１－１について

導入として豆腐の食べ比べから授業を進めていったことは、子どもの意欲を湧きたてるのに充分な効果があった。今回の実践は導入時に多くの教材を提示したため、子どもたちが意欲をもって授業に取り組むことができた。高い意欲を継続的に持続していくことが課題である。

②手だて１－２について

寺部食品への工場見学は非常に有効であった。教科書に書かれている食料生産の問題が、現実でも実際に起きている。そのことを実感させることができた。見学や質疑を通して、じわじわと理解が深まり、日本の食料生産の問題について意欲的に学習する良いきっかけになった。

③手だて１－３について

毎時間ふり返りを書かせ、子どもが考えていることを言語化した。そうすることで、どこまで理解しているのか、わかっていない部分はどこか、どんな疑問を抱いているのかを把握できた。本実践では、単元構想を予定とは入れ替えたが、子どもの思考に沿った授業が展開できたと考える。

（２）仮説２について

①手だて２－１について

意見交流の時間をもつことで、多くの子どもが同じ方向性で学習を進めることができた。理解している子は、分かっていることを言語化することで、更に理解を深めることができる。理解ができていなかった子にとっても、友達の考えを聞くことで、学習を積み上げることができる。双方にとって良い効果をもたらした。本単元では、多くの子どもが同じ課題をもって工場見学をすることができた。

②手だて２－２について

第１時と第１１時に「どちらの豆腐を選びますか」という同じ質問を投げかけた。結果はあまり変わっていないかもしれないが、答えを導き出すための思考は大きく変わったはずである。これまでの生活を見直し、これからの日本の食を憂い国産のものを選択しようと考えた子が多かった。考えたことが実際に、生活に活かされたかどうかは分からない。しかし、国産の食べ物を大切にしたいと考えたことは事実である。「こうしていきたい」と小学校５年生なりに考えたことは、小学生なりの「社会づくりへの参画」のスタートといっても良いのではないだろうか。